

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 10-073345

(43)Date of publication of application : 17.03.1998

(51)Int.Cl.

F25B 41/06
B60H 1/32

(21)Application number : 09-104583

(71)Applicant : DENSO CORP

(22)Date of filing : 22.04.1997

(72)Inventor : OISHI SHIGEJI
MIYATA YOSHIO

(30)Priority

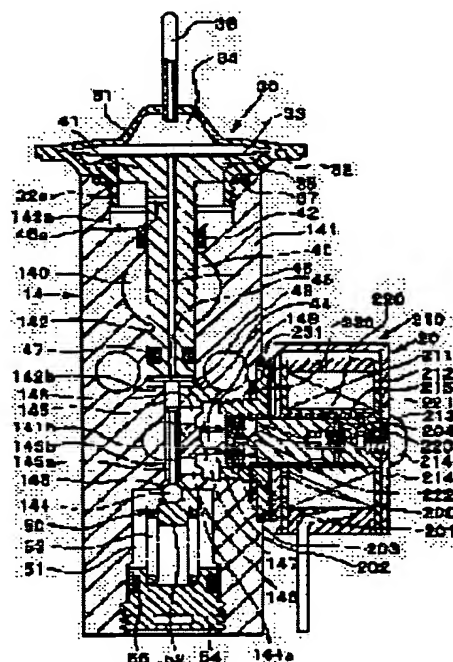
Priority number : 08171517 Priority date : 01.07.1996 Priority country : JP

(54) SOLENOID VALVE INTEGRATED EXPANSION VALVE

(57)Abstract:

PROBLEM TO BE SOLVED: To reduce refrigerant noise upon opening a solenoid valve in a solenoid valve integrated expansion valve.

SOLUTION: There are provided in an expansion valve 14, an inlet refrigerant flow passage 51, a restriction flow passage 144a for vacuum expanding a refrigerant from the inlet refrigerant flow passage 51, a valve 144 for adjusting an opening in the restriction flow passage 144a, a diaphragm actuator 30 for displacing the valve disk 144, and outlet refrigerant flow passages 145b, 146, 147, 148, 141b for supplying the refrigerant vacuum expanded in the drawing flow passage 144a to an evaporator. The outlet refrigerant flow passages 145b, 146, 147, 148, 141b are opened and closed with the valve disk 200 of the solenoid valve 20, and when the solenoid valve 20 is closed, the diaphragm actuator 30 is operated to close the valve disk 144 of the restriction flow passage based upon refrigerant pressure between the valve disk 200 of the solenoid valve 20 and the restriction flow passage 144a.



LEGAL STATUS

[Date of request for examination] 29.05.2003

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision
of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's
decision of rejection]

[Date of extinction of right]

Copyright (C); 1998,2003 Japan Patent Office

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平10-73345

(43)公開日 平成10年(1998) 3月17日

(51)Int.Cl. ⁸	識別記号	庁内整理番号	F I	技術表示箇所
F 2 5 B 41/06			F 2 5 B 41/06	R
				Y
B 6 0 H 1/32	6 1 3		B 6 0 H 1/32	6 1 3 B

審査請求 未請求 請求項の数7 O L (全 10 頁)

(21)出願番号 特願平9-104583

(22)出願日 平成9年(1997) 4月22日

(31)優先権主張番号 特願平8-171517

(32)優先日 平8(1996) 7月1日

(33)優先権主張国 日本 (J P)

(71)出願人 000004260

株式会社デンソー

愛知県刈谷市昭和町1丁目1番地

(72)発明者 大石 繁次

愛知県刈谷市昭和町1丁目1番地 株式会
社デンソー内

(72)発明者 宮田 喜夫

愛知県刈谷市昭和町1丁目1番地 株式会
社デンソー内

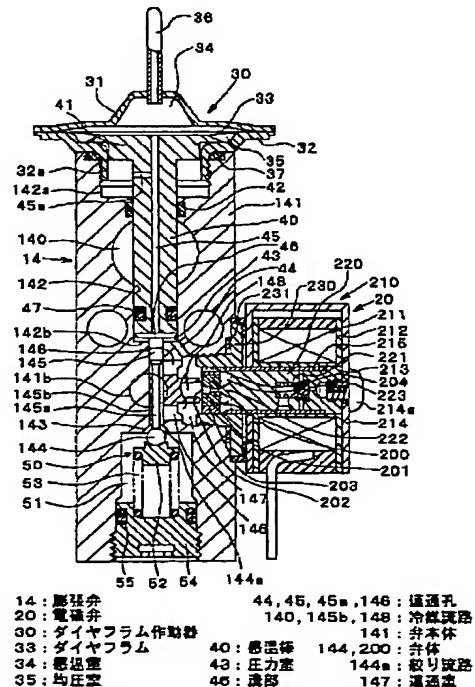
(74)代理人 弁理士 伊藤 洋二 (外1名)

(54)【発明の名称】 電磁弁一体型膨張弁

(57)【要約】

【課題】 電磁弁一体型膨張弁において、電磁弁の開弁時における冷媒騒音の低減を図る。

【解決手段】 膨張弁14に、入口冷媒流路141a、51と、この入口冷媒流路からの冷媒を減圧膨張させる絞り流路144aと、この絞り流路の開度を調整する弁体144と、この弁体を変位させるダイヤフラム作動器30と、絞り流路144aにて減圧膨張した冷媒を蒸発器に供給する出口冷媒流路145b、146、147、148、141bとを備える。この出口冷媒流路を電磁弁20の弁体200により開閉するようにし、電磁弁20の開弁時には、電磁弁20の弁体200と絞り流路144aとの間の冷媒圧力に基づいて、ダイヤフラム作動器が作動して、絞り流路の弁体144を開弁させる。



14: 膨張弁 44, 45, 45a, 146: 通過孔
20: 電磁弁 140, 145b, 148: 冷媒流路
30: ダイヤフラム作動器 40: 感温棒 141: 弁本体
33: ダイヤフラム 43: 圧力室 144a: 絞り流路
34: 感温室 45: 密封 147: 通過室
35: 均圧室

【特許請求の範囲】

【請求項1】 並列接続された複数の蒸発器（15、16）を有する冷凍サイクルに適用され、かつ、冷媒を減圧膨張させる膨張弁（14）と、冷媒流路を開閉する電磁弁（20）とを一体化した電磁弁一体型膨張弁において、

膨張弁部分の外枠を形成する膨張弁本体（141）と、この膨張弁本体（141）に形成され、高压側冷媒が導入される入口冷媒流路（141a、51）と、前記膨張弁本体（141）に形成され、前記入口冷媒流路（141a、51）より導入された冷媒を減圧膨張させる絞り流路（144a）と、この絞り流路（144a）の開度を調整する弁体（144）と、この弁体（144）を変位させる弁体作動機構（30）と、

前記膨張弁本体（141）に形成され、前記絞り流路（144a）にて減圧膨張した冷媒を蒸発器（16）に供給する出口冷媒流路（145b、146、147、148、141b）とを備え、前記電磁弁（20）は前記膨張弁本体（141）に一体に組付けられ、かつ、前記出口冷媒流路（145b、146、147、148、141b）を開閉するように配設された弁体（200）を有しており、前記電磁弁（20）の弁体（200）の開弁時に、前記電磁弁（20）の弁体（200）と前記絞り流路（144a）との間の冷媒圧力に基づいて、前記弁体作動機構（30）が作動して、前記絞り流路（144a）の弁体（144）を開弁させるようにしたことを特徴とする電磁弁一体型膨張弁。

【請求項2】 前記弁体作動機構（30）には、前記絞り流路（144a）の弁体（144）を変位させる圧力応動部材（33）が備えられており、この圧力応動部材（33）には、前記電磁弁（20）の弁体（200）と前記絞り流路（144a）との間の冷媒圧力が作用するようになっており、前記電磁弁（20）の弁体（200）の開弁時には、前記冷媒圧力により前記圧力応動部材（33）が変位して前記絞り流路（144a）の弁体（144）を開弁させるようにしたことを特徴とする請求項1に記載の電磁弁一体型膨張弁。

【請求項3】 前記圧力応動部材（33）の一面側に、前記蒸発器（16）出口の冷媒温度に対応した圧力が作用する第1圧力室（34）が形成され、前記圧力応動部材（33）の他面側には、前記電磁弁（20）の弁体（200）と前記絞り流路（144）との間の冷媒圧力が作用する第2圧力室（35）が形成されていることを特徴とする請求項2に記載の電磁弁一体型膨張弁。

【請求項4】 前記膨張弁本体（141）に設けられ、前記蒸発器（16）出口の冷媒が流れる低压冷媒流路

（140）と、

前記膨張弁本体（141）に前記低压冷媒流路（140）を貫通するように配設され、前記蒸発器（16）出口の冷媒温度を感知して前記第1圧力室（34）に伝達する感温棒（40）と、

前記膨張弁本体（141）に設けられ、前記電磁弁（20）の弁体（200）と前記絞り流路（144a）との間に連通する第1の連通手段（43、44）と、前記感温棒（40）に設けられ、前記第1の連通手段（43、44）を前記第2圧力室（35）に連通させる第2の連通手段（45、45a、46）とを備え、前記第1および第2の連通手段（43、44、45、45a、46）により、前記冷媒圧力を前記第2圧力室（35）に導入することを特徴とする請求項3に記載の電磁弁一体型膨張弁。

【請求項5】 前記弁体作動機構（30）には、前記絞り流路（144a）の弁体（144）を変位させる圧力応動部材（33）が備えられており、

この圧力応動部材（33）の一面側に、前記蒸発器（16）出口の冷媒温度に対応した圧力が作用する第1圧力室（34）が形成され、前記圧力応動部材（33）の他面側には、第2圧力室（35）が形成されており、この第2圧力室（35）内に、前記圧力応動部材（33）とともに変位するストッパ部材（400）を備え、

このストッパ部材（400）により前記第2圧力室（35）と仕切られた第3圧力室（43）を形成し、この第3圧力室（43）には、前記電磁弁（20）の弁体（200）と前記絞り流路（144）との間の冷媒圧力を導入し、

前記第2圧力室（35）には前記電磁弁（20）の弁体（200）より下流側の冷媒圧力を導入することを特徴とする請求項1に記載の電磁弁一体型膨張弁。

【請求項6】 冷媒を圧縮し吐出する圧縮機（10）と、

この圧縮機（10）から吐出されたガス冷媒を冷却し凝縮させる凝縮器（11）と、この凝縮器（11）で凝縮した液冷媒を減圧膨張させる第1の膨張弁（13）と、

この第1の膨張弁（13）と並列に設けられ、前記凝縮器（11）で凝縮した液冷媒を減圧膨張させる第2の膨張弁（14）と、

前記第1の膨張弁（13）にて減圧膨張した冷媒を蒸発させる第1の蒸発器（15）と、

この第1の蒸発器（15）と並列に設けられ、前記第2の膨張弁（14）にて減圧膨張した冷媒を蒸発させる第2の蒸発器（16）とを備え、

前記第1、第2の膨張弁（15、16）のうち、少なくとも一方を、請求項1ないし5のいずれか1つに記載の電磁弁一体型膨張弁により構成したことを特徴とする冷

凍サイクル。

【請求項 7】 前記電磁弁（20）の弁体（200）の開弁時に、前記電磁弁（20）の弁体（200）と前記絞り流路（144a）との間の冷媒圧力、および前記蒸発器（16）出口の冷媒温度に対応した圧力が前記弁体作動機構（30）に作用し、前記両圧力に基づいて、前記弁体作動機構（30）が前記弁体（144）を変位させることを特徴とする請求項 6 に記載の冷凍サイクル。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、電磁弁を膨張弁の下流側に配置し、この両者を一体化した電磁弁一体型膨張弁に関するもので、例えば、車室内のフロント側とリア側の双方に、冷凍サイクルの蒸発器を内蔵する空調ユニットを配設する車両用空調装置等に用いて好適である。

【0002】

【従来の技術】従来より、例えば車室内のフロント側の空調制御とリア側の空調制御とをそれぞれ独立して行うために、車室内前後の空調ユニット内にそれぞれ冷却用の蒸発器を配設するとともに、この 2 つの冷却用の蒸発器とこれらの蒸発器に流入する冷媒を減圧するための膨張弁をそれぞれ並列に配置した車両空調用の冷凍サイクルが知られている。

【0003】そして、この冷凍サイクルにおいては、膨張弁と直列に電磁弁を設置して、これらの蒸発器への冷媒流れを切り替えるようにしている。しかし、この電磁弁の急激な開閉作動に伴って、ウォータハンマー音が発生するという問題がある。そこで、特開平 7-151422 号公報では、膨張弁本体に電磁弁を一体化することにより、電磁弁と膨張弁の両者の小型化を図るとともに、電磁弁を膨張弁の下流側（すなわち、気液 2 相状態の冷媒が流れる低圧側の流路）に配置して、電磁弁の開弁時におけるウォータハンマー音を低減するようにしたものが提案されている。

【0004】

【発明が解決しようとする課題】しかしながら、上記公報記載の従来技術について、本発明者らが種々実験検討したところ、電磁弁の開弁時には、以下の理由から、騒音低減を図ることができないことが分かった。すなわち、冷凍サイクルにおいて並列接続された 2 つの蒸発器のうち、一方の蒸発器が電磁弁の開弁により冷媒の流れが停止されると、この蒸発器の温度は周囲温度（室温）まで上昇するので、この蒸発器の冷媒出口側に設けられた膨張弁の感温筒温度も室温まで上昇することになる。これに対し、この膨張弁の低圧側圧力は、他方の蒸発器への冷媒循環（圧縮機の運転）により低圧となっている。この結果、膨張弁の弁体には、開弁方向の力が作用し、膨張弁は全開状態になっている。

【0005】従って、この膨張弁の全開状態において、

電磁弁が開弁すると、今まで冷媒流れが停止していた蒸発器に、大流量の冷媒が急激に流れ出し、冷媒流動音を発生するとともに、膨張弁下流部の圧力急降下による騒音を発生することが分かった。本発明は上記点に鑑みてなされたもので、電磁弁一体型膨張弁において、電磁弁の開弁時における冷媒騒音の低減を図ることを目的とする。

【0006】

【課題を解決するための手段】上記目的を達成するため、請求項 1～7 記載の発明においては、高圧側冷媒が導入される入口冷媒流路（141a、51）と、この入口冷媒流路（141a、51）より導入された冷媒を減圧膨張させる絞り流路（144a）と、この絞り流路（144a）の開度を調整する弁体（144）と、この弁体（144）を変位させる弁体作動機構（30）と、絞り流路（144a）にて減圧膨張した冷媒を蒸発器（16）に供給する出口冷媒流路（145b、146、147、148、141b）とを備え、電磁弁（20）の弁体（200）により出口冷媒流路（145b、146、147、148、141b）を開閉するようにし、電磁弁（20）の弁体（200）の開弁時には、電磁弁（20）の弁体（200）と絞り流路（144a）との間の冷媒圧力に基づいて、弁体作動機構（30）が作動して、絞り流路（144a）の弁体（144）を開弁させることを特徴としている。

【0007】上記構成によれば、電磁弁（20）が開弁している間に、電磁弁（20）の弁体（200）の上流側は、冷凍サイクルの運転により高圧側圧力となる。従って、この高圧側圧力を利用して弁体作動機構（30）を作動させることにより、膨張弁（14）の弁体（144）を開弁させることができる。それ故、次に、電磁弁（20）を開弁させるときに、大流量の冷媒が急激に流れ出すという不具合が発生せず、電磁弁（20）の開弁時における冷媒流動音等の発生を効果的に抑制できる。また、電磁弁（20）は、膨張弁（14）の弁体（144）より下流側の気液 2 相状態の冷媒流域に設置されているから、電磁弁の開弁時におけるウォータハンマー音も従来通り、良好に低減できる。

【0008】さらに、請求項 4 記載の発明では、膨張弁本体（141）に蒸発器（16）出口の冷媒が流れる低圧冷媒流路（140）を設けるとともに、この低圧冷媒流路（140）を貫通するように感温棒（40）を配設して、この感温棒（40）により蒸発器（16）出口の冷媒温度を感知して第 1 圧力室（34）に伝達し、膨張弁本体（141）に、電磁弁（20）の弁体（200）と絞り流路（144a）との間に連通する第 1 の連通手段（43、44）を設け、この第 1 の連通手段（43、44）を第 2 圧力室（35）に連通させる第 2 の連通手段（45、45a、46）を感温棒（40）に設け、この第 1 および第 2 の連通手段（43、44、45、45

a、46)により、電磁弁(20)の弁体(200)と絞り流路(144a)との間の冷媒圧力を第2圧力室(35)に導入することを特徴としている。

【0009】これにより、膨張弁本体(141)に、蒸発器出口冷媒が流れる低压冷媒流路(140)と、この冷媒温度を感知する感温棒(40)とを内蔵させた、小型簡潔な構成の膨張弁において、請求項1と同様に、電磁弁の開弁時における冷媒流動音等の発生を効果的に抑制できる。また、請求項5記載の発明では、圧力応動部材(33)の一面側に、蒸発器(16)出口の冷媒温度に対応した圧力が作用する第1圧力室(34)を形成するとともに、圧力応動部材(33)の他面側には、第2圧力室(35)を形成し、この第2圧力室(35)内に、前記圧力応動部材(33)とともに変位するストッパ部材(400)を備え、このストッパ部材(400)により前記第2圧力室(35)と仕切られた第3圧力室(43)を形成し、この第3圧力室(43)には、電磁弁(20)の弁体(200)と絞り流路(144a)との間の冷媒圧力を導入し、第2圧力室(35)には電磁弁(20)の弁体(200)より下流側の冷媒圧力を導入することを特徴としている。

【0010】上記構成によれば、電磁弁(20)が開弁している間は、電磁弁上流側に加わるサイクル高圧側圧力を、ストッパ部材(400)に作用させて、膨張弁(14)の弁体(144)を開弁させることができる。これにより、電磁弁(20)の開弁時における冷媒流動音等の発生を効果的に抑制できるとともに、電磁弁(20)の開弁時に、サイクル高圧側圧力が弁体作動機構(30)の圧力応動部材(33)には直接作用しないので、弁体作動機構(30)をサイクル高圧側圧力に耐える耐圧構造とする必要がなく、弁体作動機構(30)を低コストで製造できる。

【0011】なお、上記各構成要素のカッコ内の符号は、後述する実施形態記載の具体的構成要素との対応関係を示すものである。

【0012】

【発明の実施の形態】

(第1実施形態)図1～図5は本発明の第1実施形態を示すものであり、図1は、本発明による電磁弁一体型膨張弁14を適用した冷凍サイクルの全体構成を示しており、この図1の冷凍サイクルは、車両のフロントシート側とリアシート側にそれぞれ独立に制御可能な空調ユニットを持つ車両用空調装置に使用されるものである。

【0013】図1の冷凍サイクルは、圧縮機10を備えており、この圧縮機10には、動力伝達を断続する電磁クラッチ(図示せず)が装着されており、この電磁クラッチが接続状態になると、図示しない車両エンジンから動力が伝達されて圧縮機10は作動し、吸入冷媒を圧縮し、高温高压のガス冷媒として吐出する。凝縮器11は、図示しない冷却ファンによる空冷作用を受けて圧縮

機10からの吐出ガス冷媒を冷却して凝縮させ、この凝縮後の液冷媒は受液器12内に流入する。この受液器12は、その内部に流入した凝縮冷媒を気液分離して、液冷媒のみを流出させる。

【0014】受液器12の下流側には、液冷媒を気液2相状態に減圧膨張させる第1、第2の膨張弁13、14と、この第1、第2の膨張弁13、14を通過した冷媒を蒸発させる第1、第2の蒸発器15、16が相互に並列に配設されている。ここで、第1の膨張弁13および第1の蒸発器15は、車室内前部の計器盤部に配置される前部空調ユニット17内に設けられ、車室内のフロントシート側の空調のために使用される。第1の膨張弁13は周知のごとく第1の蒸発器15の出口冷媒の過熱度を所定値に維持するように弁開度が自動調整される温度式の膨張弁であって、第1の蒸発器15の出口冷媒の温度を感知して内部の冷媒圧力が変化する感温筒13aを有している。

【0015】一方、第2の膨張弁14および第2の蒸発器16は、車室内後部、例えばワゴンタイプの自動車の天井部に配置される後部空調ユニット18内に設けられ、車室内のリヤシート側の空調のために使用される。なお、図示しないが、前部、後部空調ユニット17、18内に空調用の送風機等が内蔵されていることはもちろんである。第1、第2の蒸発器15、16の冷媒出口側は合流して圧縮機10の吸入側に接続されている。

【0016】そして、第2の膨張弁14は本発明による電磁弁一体型膨張弁で構成されており、以下、この電磁弁一体型膨張弁14の具体例を図1および図2～5に基づいて説明する。この膨張弁14は、本例では、ボックス型膨張弁として構成されており、蒸発器16の出口冷媒が流れる低压冷媒流路140およびこの低压冷媒流路140の冷媒温度を感知する後述の感温機構を一体に内蔵している。

【0017】このボックス型膨張弁14に常閉型電磁弁20(図2参照)が一体に組付られている。膨張弁14は、アルミニウム等の金属で成形された角柱状の弁本体141を備えている。この弁本体141は、図1に示すように、その外周壁の下側寄りの位置に、冷媒流入口141a及び冷媒流出口141bを備えており、冷媒流入口141aは、受液器12からの高圧側液冷媒が流入し、一方、冷媒流出口141bは、後述の絞り流路144にて減圧膨張した低压冷媒を弁本体141から流出させるもので、蒸発器16の冷媒入口16aに接続される。

【0018】また、弁本体141の上部側の部位において低压冷媒流路140が弁本体141の軸直角方向に貫通するように設けられており、そして、この低压冷媒流路140の両端部に、冷媒流入口141cと冷媒流出口141dが開口している。冷媒流入口141cは、蒸発

器16の冷媒出口16bと接続され、蒸発器16にて蒸発したガス冷媒が流入する。

【0019】この流入ガス冷媒は、さらに、低压冷媒流路140を通して、冷媒流出口141dから弁本体141外へ流出する。冷媒流出口141dは、圧縮機10の吸入側に接続される。弁本体141の中心部には、段付き内孔142が同軸的に形成されており、この段付き内孔142は、上記低压冷媒流路140を貫通して、弁本体141の中心部を上下方向に延びている。そして、この段付き内孔142の下端（一端）部に弁座143が形成され、この弁座143に対向して球状の弁体144が上下動可能に配置されている。この弁座143と球状の弁体144との間に、冷媒流入口141aからの高压側液冷媒を減圧膨張させる絞り流路144a（図2参照）が構成される。

【0020】段付き内孔142の下側部位には、作動棒145が上下方向に移動可能に嵌合している。この作動棒145の下端部は球状の弁体144に当接して、球状の弁体144を変位させることができる。また、この作動棒145の下側部分に小径部145aを形成して、この小径部145aと段付き内孔142の内周面との間に、環状の冷媒流路145bを形成している。

【0021】弁本体141において、段付き内孔142から直交する方向に連通孔146および連通室147が形成してある。これにより、環状の冷媒流路145bは連通孔146を介して連通室147に常時連通している。また、連通孔146は複数個設けてあり、この複数の連通孔146の中間部位において、連通室147内に円筒状部分が突出しており、この円筒状部分にて冷媒流路148が形成されている。

【0022】上記の冷媒流路148の端面には、常閉型電磁弁20の弁体200が対向配置されており、連通室147と冷媒流路148との連通を弁体200により断続するようになっている。ここで、冷媒流路148は、図3に示すように、前記した冷媒流出口141bに連通している。電磁弁20の具体的説明は後述する。次に、膨張弁14の弁体144を作動させるための弁体作動機構について説明すると、本発明の弁体作動機構を構成するダイヤフラム作動器30は、上下2つのケーシング31、32と、圧力応動部材であるダイヤフラム33とを備えており、両ケーシング部材31、32は、ステンレス系の金属よりなるもので、同じくステンレス系の金属よりなる円板状ダイヤフラム33の外周縁部を挟持し、固定している。

【0023】ここで、円板状ダイヤフラム33は図1の上下方向に弾性変形可能に組み付けられており、ダイヤフラム33により両ケーシング部材31、32の内部空間は感温室（第1圧力室）34と均圧室（第2圧力室）35とに仕切られている。上側の感温室34内には、所定圧力にて冷凍サイクル循環冷媒と同一の冷媒がキャピ

ラリーチューブ36により封入されている。なお、下側のケーシング部材32の環状開口部32aは、弁本体141の段付き内孔142の一端部（上端部）に形成された大径開口端部142aにネジ止め固定されている。このネジ止め固定部は、ゴム製のＯリング（弾性シール材）37にて気密が維持されるようになっている。

【0024】感温棒40は、アルミニウム等の熱伝導の良好な金属材料により円柱状に形成されており、そして、蒸発器出口冷媒の温度を感知するために、図1、2に示すように、蒸発器出口からのガス冷媒が流れる低压冷媒流路140を貫通して配設されている。感温棒40の一端部（上端部）は大径部41として構成され、この大径部41は均圧室35内に配置され、円板状ダイヤフラム33の片側の面（下側面）に当接するようになっている。そのため、感温棒40の温度変化は、金属製の薄板からなるダイヤフラム73を介して感温室34内の冷媒に伝達され、感温室34内の冷媒圧力は、低压冷媒流路140を流れる蒸発器出口冷媒の温度に対応した圧力となる。

【0025】また、感温棒40は弁本体141の段付き内孔142内に軸方向に摺動可能に嵌合して、ダイヤフラム33の変位を前述した作動棒145を介して弁体144に伝達する変位伝達部材の役割を兼ねている。このため、感温棒40の他端部（下端部）は、作動棒145の一端部（上端部）に当接している。ここで、段付き内孔142の軸方向において、低压冷媒流路140と均圧室35との間の部位にはゴム製のＯリング（弾性シール材）42が配設され、このＯリング42により低压冷媒流路140と均圧室35との間の気密が維持されるようになっている。

【0026】さらに、均圧室35には、本発明独自の下記圧力導入流路にて電磁弁20の弁体200と絞り流路144aとの間の冷媒圧力を導入するようになっている。すなわち、図2に示すように、感温棒40の下端部と、段付き内孔142の中間段付面142bとの間に圧力室43が形成されており、この圧力室43は、弁本体141に設けられた連通孔44により連通室147に連通している。

【0027】また、感温棒40にはその中心部を軸方向に貫通する連通孔45があけてあり、さらに、感温棒40の下端部には、図4、5に示す断面U状の溝部46が設けられているため、感温棒40の下端部が作動棒145の上端部に当接していても、圧力室43は溝部46を通して連通孔45に常時連通している。以上の圧力導入流路（連通孔44→圧力室43→溝部46→連通孔45）を通して、電磁弁20の弁体200と絞り流路144aとの間の冷媒圧力（具体的には、連通室147の圧力）が均圧室35に導入される。

【0028】連通孔45には、感温棒40の中心部から半径方向に延びる補助連通孔45aが接続されており、

この補助連通孔 45a によっても、均圧室 35 に上記冷媒圧力が導入される。なお、上記連通孔 44、45、45a は、例えば直径 1.0mm 程度の大きさでよい。また、断面 U 状の溝部 46 の深さは、例えば、0.5mm 程度の大きさでよい。

【0029】また、段付き内孔 142 の軸方向において、低圧冷媒流路 140 と圧力室 43 との間の部位にはゴム製の O リング（弾性シール材）47 が配設され、この O リング 47 により低圧冷媒流路 140 と圧力室 43 との間の気密が維持されるようになっている。次に、膨張弁 14 の弁体 144 に、所定のバネ力を付与するためのスプリング機構 50 について説明すると、弁本体 141 において、段付き内孔 142 の下方側には、スプリング機構 50 の収容室 51 が形成されており、この収容室 51 は、前記した高圧液冷媒が流入する冷媒流入口 141a に連通している。収容室 51 内の上端部には、ステンレス製の弁体 144 に溶接等の手段で接合された金属製の支持板 52 が配置されている。

【0030】この支持板 52 にコイルスプリング（バネ手段）53 の一端が当接して支持されている。コイルスプリング 53 の他端は金属製プラグ 54 により支持されている。このプラグ 54 は収容室 51 の外部への開口端を閉塞する蓋部材の役割を果たすとともに、弁本体 141 にネジにより脱着可能に固定されており、プラグ 54 のネジ止め位置を調整することにより、コイルスプリング 53 の取付荷重を調整して、弁体 144 に作用するバネ力を調整できるようにしてある。

【0031】膨張弁 14 により設定される蒸発器出口冷媒の過熱度は、上記バネ力の調整により調整可能である。また、プラグ 54 の先端側の部位には、ゴム製の O リング（弾性シール材）55 が配設され、この O リング 55 により収容室 51 と外部との間の気密が維持されるようになっている。

【0032】ところで、常閉型電磁弁 20 は、弁体 200 と、電磁石 210 と、磁性体からなる円柱状プランジャ 220 が備えられているパイロット式電磁弁であって、弁体 200 の形状は略円板状であり、中心部には微細な弁孔 202 が形成されている。この弁孔 202 は樹脂部材 201 に形成されており、この樹脂部材 201 は、高い寸法精度で成形でき、かつ冷媒流路 148 の端面との間のシール性が良好な樹脂材質（例えば、フッ素系樹脂）で成形することが好ましい。

【0033】この樹脂部材 201 の外周部には、黄銅等の金属で成形されたピストン部材 203 が配置され、この両者 201、203 はかしめ等の手段にて一体に結合されている。このピストン部材 203 は非磁性金属からなる取付ねじ部材 230 の内周部に、図 2 の左右方向に摺動可能に嵌合している。この取付ねじ部材 230 は常閉型電磁弁 20 を弁本体 141 に脱着可能にねじ止め固定するもので、非磁性金属からなる円筒状のものであ

る。取付ねじ部材 230 のネジ止め固定部には、ゴム製の O リング（弾性シール材）231 が配設され、この O リング 231 により連通室 147 と外部との間の気密が維持されるようになっている。

【0034】電磁石 210 は、ソレノイド 211 を巻装した樹脂製のボビン 212 を備えており、このボビン 212 の中空先端部内には、円柱状磁極部材 213 が同軸的に嵌装されており、この磁極部材 213 は磁性材料からなる磁性枠体 214 にねじ 214a により締めつけ固定されている。また、ボビン 212 の中空部内には、非磁性材料からなる円筒状支持部材 215 が同軸的にかつ嵌着固定されており、この支持部材 215 は、その一端部にて、磁極部材 213 の外周壁に嵌着固定され、また、他端部は取付ねじ部材 230 の内周部に嵌着固定されている。これにより、支持部材 215 を介して、取付ねじ部材 230 と電磁石 210 部分が一体に結合されている。

【0035】プランジャ 220 は、磁性材料にて円柱状に成形されており、支持部材 215 の中空部内に軸方向に摺動可能に嵌装されている。このプランジャ 220 は、弁体 200 側の端面に円錐状に突出した弁部 222 を有している。そして、プランジャ 220 は、コイルスプリング 221 により、図示の左方向、すなわち、弁体 200 側へ付勢されて、その弁部 222 が弁体 200 の弁孔 202 部分に着座することにより、この弁孔 202 を閉じるようになっている。

【0036】また、プランジャ 220 の弁部 222 側の端面と、弁体 200 との間には背圧室 223 が形成され、この背圧室 223 と連通室 147 との間を常時、連通させる微小孔 204 が弁体 200 に設けられている。このように構成した常閉型電磁弁 20 においては、ソレノイド 211 が通電され、磁束を発生すると、プランジャ 220 が、コイルスプリング 221 に抗して磁極部材 213 により吸引されて、弁部 222 が弁孔 202 から開離して、弁孔 202 が開口状態となる。すると、背圧室 223 が冷媒流路 148 を通して冷媒流出口 141b に連通して、背圧室 223 の圧力が冷媒流出口 141b 側の圧力（すなわち、蒸発器 16 の低圧）まで低下する。

【0037】一方、連通室 147 は、今まで、冷媒流路 148 との間の連通が弁体 200 により阻止されて、冷凍サイクルの高圧側圧力になっているので、連通室 147 の圧力が背圧室 223 の圧力より高い状態となり、この両室 147、223 間の圧力差により、弁体 200 が図 2、3 の右方へ移動し、冷媒流路 148 を開口させる。つまり、常閉型電磁弁 20 はソレノイド 211 への通電によりプランジャ 220 を図の右方へ移動させて、両室 147、223 間の圧力差を生成し、これにより弁体 200 を開弁状態にする。

【0038】逆に、ソレノイド 211 への通電を遮断

し、磁束を消滅させると、コイルスプリング 221 のバネ力によりプランジャ 220 が図 2、3 の左方へ移動し、弁部 222 が弁体 200 の弁孔 202 部分に着座して、この弁孔 202 を閉じる。すると、これまで低圧側圧力になっていた背圧室 223 内に、弁体 200 の微小孔 204 を通して連通室 147 内の冷媒が導入される。そのため、プランジャ 220 の弁部 222 が弁孔 202 に着座して弁孔 202 を閉じるとともに、弁体 200 が図 2、3 の左方へ移動し、冷媒流路 148 の端面に着座し、冷媒流路 148 を閉じる。これにより、常閉型電磁弁 20 が閉弁状態に復帰する。

【0039】次に、上記構成に基づいて本実施形態の作動を説明する。図 1 において、圧縮機 10 が車両のエンジンから電磁クラッチを介して動力を伝達されて作動すると、圧縮機 10 は蒸発器 15、16 の下流側流路の冷媒を吸入、圧縮して、高温高圧のガス冷媒を凝縮器 11 に向けて吐出する。すると、この凝縮器 11 ではガス冷媒が冷却されて凝縮する。

【0040】この凝縮後の冷媒は次に受液器 12 内に流入し、冷媒の気液が分離され、液冷媒が受液器 12 から流出して、並列配置された第 1、第 2 の膨張弁 13、14 側へ向かう。ここで、車両のリヤシート側に乗員が搭乗していない場合は、リヤシート側を空調する必要がないため、後部空調ユニット 18 を作動させない。そのため、電磁弁 20 のソレノイド 211 への通電が遮断され、弁体 200 が閉弁状態となり、冷媒流路 148 が閉塞されている。このため、第 2 の蒸発器 16 の入口側冷媒流路が閉塞され、第 2 の蒸発器 16 には冷媒が循環しない。

【0041】一方、前部空調ユニット 17 側においては、第 1 の膨張弁 13 にて受液器 12 からの液冷媒が減圧、膨張して、低温低圧の気液 2 相状態となる。この気液 2 相冷媒が第 1 の蒸発器 15 で空調空気から吸熱して蒸発するため、空調空気は冷却され冷風となり、車室内のフロントシート側を空調する。ここで、膨張弁 13 の開度は、周知のごとく感温筒 13a の感知する蒸発器出口冷媒温度に応じた開度に自動調整され、蒸発器出口冷媒の過熱度を所定値に維持する。

【0042】ところで、後部空調ユニット 18 に備えられている第 2 の膨張弁 14 は電磁弁一体型のもので、電磁弁 20 の閉弁時には、第 2 の蒸発器 16 に冷媒が循環していないため、膨張弁 14 の弁本体 141 内に形成されている低圧冷媒流路 140 の冷媒温度は室温程度の温度まで上昇している。このため、感温室 34 の温度も室温程度になっている。

【0043】しかし、本実施形態によると、均圧室 35 に、連通孔 44 → 圧力室 43 → 溝部 46 → 連通孔 45、45a からなる圧力導入流路を通して、電磁弁 20 の弁体 200 と絞り流路 144a との間の連通室 147 の冷媒圧力が導入されている。そして、この連通室 147

は、電磁弁 20 の閉弁時には、絞り流路 144a 等を介して冷凍サイクルの高圧側に連通して、高圧側圧力になっている。

【0044】従って、電磁弁 20 の閉弁時には、均圧室 35 にサイクル高圧側圧力が作用することになり、かつサイクル高圧側圧力は室温の冷媒飽和圧力より十分高い圧力になっているため、感温室 34 の温度が室温程度まで上昇しても、感温室 34 の圧力より均圧室 35 の圧力の方が十分高くなる。この結果、ダイヤフラム作動器 30 のダイヤフラム 33 は、図 2 の上方へ弾性変形し、これに伴って、弁体 144、作動棒 145、および感温棒 40 がコイルスプリング 53 のバネ力により図 2 の上方へ変位し、弁体 144 は弁座面 143 に着座し、閉弁状態となる。

【0045】但し、弁体 144 および弁座面 143 とも金属製であるため、弁体 144 は厳密な閉弁状態とはならず、弁体 144 と弁座面 143 との間の微小隙間を通して収容室 51 の高圧側圧力が連通室 147 側へ洩れる。次に、上記のように膨張弁 14 の弁体 144 が閉弁している状態において、後部空調ユニット 18 を作動させるために、電磁弁 20 のソレノイド 211 に通電すると、電磁弁 20 の弁体 200 が開弁し、円筒状の冷媒流路 148 が開口する。しかし、このとき、膨張弁 14 の弁体 144 が閉弁しているので、電磁弁 20 の開弁により大流量の冷媒が急激に流れ始めることがない。

【0046】つまり、ダイヤフラム作動器 30 の均圧室 35 内の圧力は、電磁弁 20 の開弁後、前述の圧力導入流路を経て徐々に低圧側圧力まで低下するので、膨張弁 14 の弁体 144 の開度も徐々に増加することになり、その結果、膨張弁 14 を通過する冷媒流量も徐々に増加する。従って、電磁弁 20 の開弁時に、膨張弁 14 の弁体 144 前後の急激な圧力変動による騒音や、大流量冷媒の急激な流れによる流動音が発生することを効果的に抑制できる。

【0047】そして、電磁弁 20 の開弁後、所定時間が経過すると、ダイヤフラム作動器 30 の均圧室 35 内の圧力は蒸発器 16 の入口側の冷媒圧力（蒸発器入口側の低圧圧力）となるので、これ以後は、この均圧室 35 内に加わる蒸発器入口側の低圧圧力と、感温室 34 内の蒸発器出口冷媒温度に対応した冷媒圧力との差圧と、スプリング機構 50 のコイルスプリング 53 のバネ力との釣り合いに応じた位置に、膨張弁 14 の弁体 144 が変位する。

【0048】これにより、膨張弁 14 の弁体 144 は、蒸発器出口冷媒が所定の過熱度を維持するように、絞り流路 144a の開度を調整して冷媒流量を調整する。つまり、膨張弁 14 は、内部均圧式の膨張弁として、冷媒流量の調整を行う。なお、上記作動説明から理解されるように、電磁弁 20 の閉弁時には、ダイヤフラム作動器 30 の均圧室 35 内にサイクル高圧側圧力が作用するの

で、ダイヤフラム作動器 30 の具体的設計に際しては、ダイヤフラム 33 を耐疲労性に優れたステンレス系の材質としたり、ケーシング部材 31、32 の肉厚を厚くした形状にすることが好ましい。

〔第 2 実施形態〕図 6 は第 2 実施形態を示すもので、本例では、第 1 実施形態における感温棒 40 を廃止し、その代わりに、図 1 の感温筒 13 a に相当する感温筒 14 a を蒸発器 16 の冷媒出口部に設け、この感温筒 14 a をキャピラリーチューブ 36' により感温室 34 に連結している。

〔0049〕そして、感温棒 40 の廃止に伴って、作動棒 145 とダイヤフラム 33 との間には、変位伝達用のストッパー部材 400 が介在してある。このストッパー部材 400 は、その軸方向の両端部に大径部 401、402 を有し、中間に小径部 403 を有する形状に形成され、下側の大径部 402 の外周面にゴム製の O リング（弾性シール材）47 を配設して、大径部 402 下方の圧力室 43 と、均圧室 35 との間を気密に仕切っている。

〔0050〕膨張弁 14 の弁体 144 の下流側において、作動棒 145 の小径部 145 a の周囲に形成される環状の冷媒流路 145 b は、連通孔 146 により連通室 147 に連通している。なお、この連通室 147 と、冷媒流出口 141 b に通じている冷媒流路 148 との間を電磁弁 20 の弁体 200 により開閉する点は第 1 実施形態と同じである。

〔0051〕また、スプリング機構 50 の収容室 51 を冷媒流入口 141 a の下流部位に直接、形成している。従って、本例では、第 1 実施形態におけるプラグ 54 の代わりに、冷媒流通孔 54 a を開けた保持板 54 b を弁本体 141 にネジ止め固定している。膨張弁 14 の弁体 144 と電磁弁 20 の弁体 200 との間に位置する連通孔 146 と、ストッパー部材 400 の大径部 402 下方の圧力室 43 とを連通させる連通孔 44 を設けてある。

〔0052〕これにより、第 2 実施形態においても、電磁弁 20 の閉弁時に、電磁弁 20 の弁体 200 の上流側にある連通孔 146 から連通孔 44 を通して圧力室 43 にサイクル高圧側圧力を作用させることができる。その結果、ストッパー部材 400 が上方へ押し上げられ、膨張弁 14 の弁体 144 が閉弁する。この場合、圧力室 43 内のサイクル高圧側圧力がストッパー部材 400 の大径部 402 に作用するので、第 1 実施形態の感温棒 40 に比して、受圧面積を増大することにより、ストッパー部材 400 の上方押し上げ力を増大できる。

〔0053〕また、弁本体 141 には、冷媒流出口 141 b を均圧室 35 に連通させる連通孔 149 が設けてある。具体的には、この連通孔 149 は、O リング 47 より上方に位置する小径部 403 の外周側に開口している。これにより、蒸発器 16 の入口側の冷媒圧力は、冷媒流出口 141 b から連通孔 149 を通して均圧室 35

内に導入される。

〔0054〕従って、電磁弁 20 の開弁時には、感温筒 14 a が感知する蒸発器出口冷媒温度に応じた感温室 34 の冷媒圧力と、連通孔 149 を通して均圧室 35 内に導入される蒸発器入口側の冷媒圧力に応じて、膨張弁 14 の弁体 144 が変位して、絞り流路 144 a の開度（冷媒流量）を調整する。上記説明から理解されるように、第 2 実施形態では、均圧室 35 と圧力室 43 との間が O リング 47 により仕切られ、電磁弁 20 の閉弁時にも、均圧室 35 にはサイクル高圧が直接作用しないので、ダイヤフラム作動器 30 の具体的設計に際して、ダイヤフラム 33 やケーシング部材 31、32 の耐圧強度は従来通りでよい。

〔第 3 実施形態〕図 7 は第 3 実施形態を示すもので、本例では、第 2 実施形態における弁本体 141 の連通孔 149、ストッパー部材 400 の大径部 402、および大径部 402 の外周面の O リング 47 を廃止し、その代わりにストッパー部材 400 の小径部 403 を下端部まで延ばしている。そして、この小径部 403 の周囲の空隙部 403 a を連通孔 44 に連通させている。これにより、ダイヤフラム 33 下方の均圧室 35 を、上記空隙部 403 a および連通孔 44 を介して、電磁弁 20 の弁体 200 の上流側にある連通孔 146、連通室 147 に連通させるようにしたものである。

〔0055〕従って、第 3 実施形態は、ダイヤフラム 33 下方の均圧室 35 に電磁弁 20 の弁体 200 の上流側の冷媒圧力を作用させる点では第 1 実施形態と同じである。つまり、第 1 実施形態および第 3 実施形態による電磁弁一体型膨張弁 14 を用いた冷凍サイクルを模式的に図示すると、図 8 のようになり、膨張弁 14 においてダイヤフラム作動器 30 内のダイヤフラム 33 下方の均圧室 35 に、膨張弁 14 の絞り流路 144 a 下流側と電磁弁 20 の弁体 200 の上流側との間の冷媒圧力を作用させる圧力導入流路 R を備えている。

〔0056〕この圧力導入流路 R は、第 1 実施形態では、連通孔 44 → 圧力室 43 → 溝部 46 → 連通孔 45、45 a からなる流路にて構成され、また、第 3 実施形態では連通孔 44 および空隙部 403 a にて圧力導入流路 R が構成されている。なお、本発明は、車両用冷凍サイクルに限ることなく、一般建造物内に装備した空調装置、冷凍、冷蔵装置等の冷凍サイクルにも、広く適用できる。

【図面の簡単な説明】

【図 1】本発明の第 1 実施形態を示す要部断面を含む冷凍サイクル図である。

【図 2】本発明の第 1 実施形態による電磁弁一体型膨張弁の縦断面図で、図 1 とは異なる断面位置を示す。

【図 3】図 2 の膨張弁の横断面図である。

【図 4】図 2 の感温棒の下面図である。

【図 5】図 4 の A-A 矢視断面図である。

15

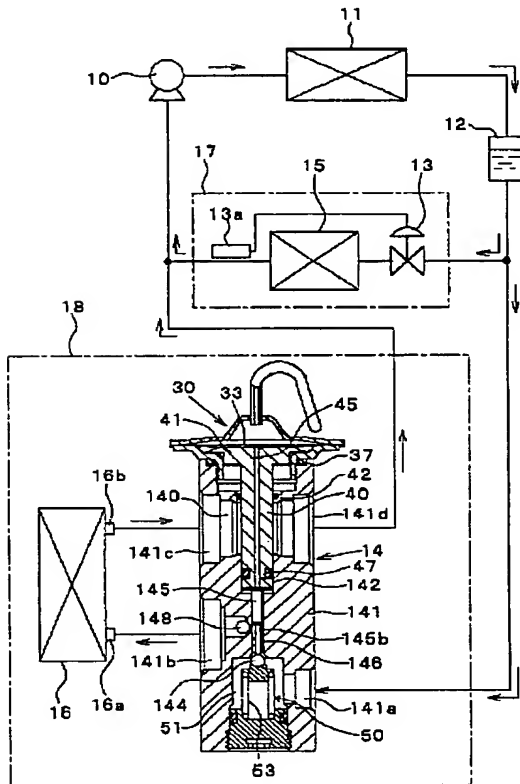
【図6】本発明の第2実施形態による電磁弁一体型膨張弁の縦断面図である。

【図7】本発明の第3実施形態による電磁弁一体型膨張弁の縦断面図である。

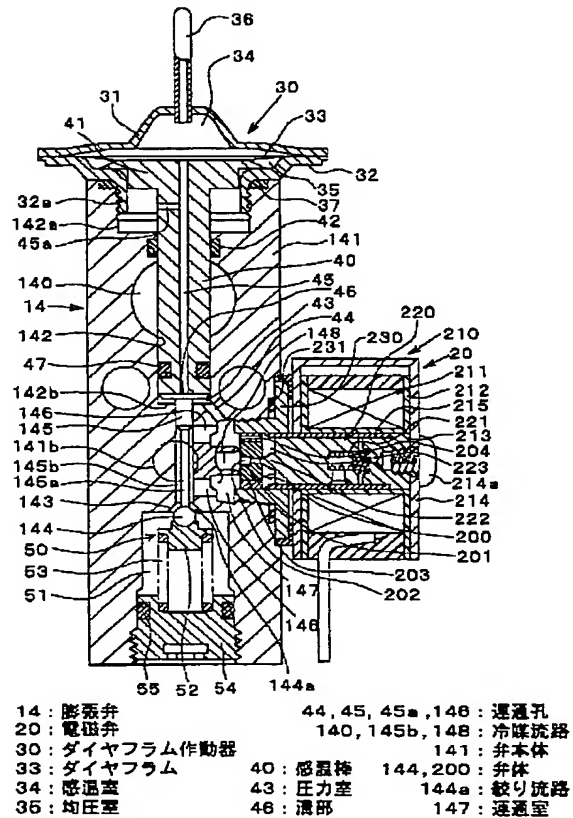
【図8】本発明の第1実施形態および第3実施形態による電磁弁一体型膨張弁を包含する冷凍サイクル図である。

【符号の説明】

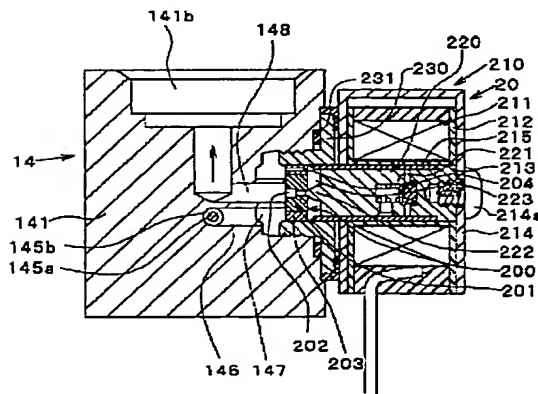
【図1】



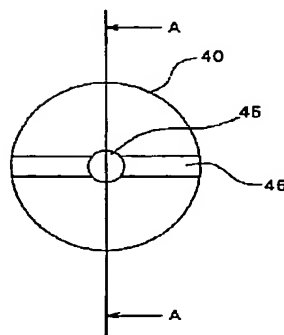
【図2】



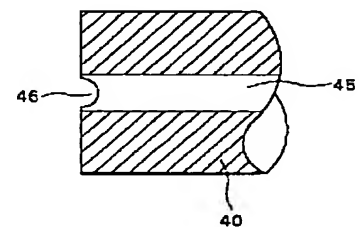
【図3】



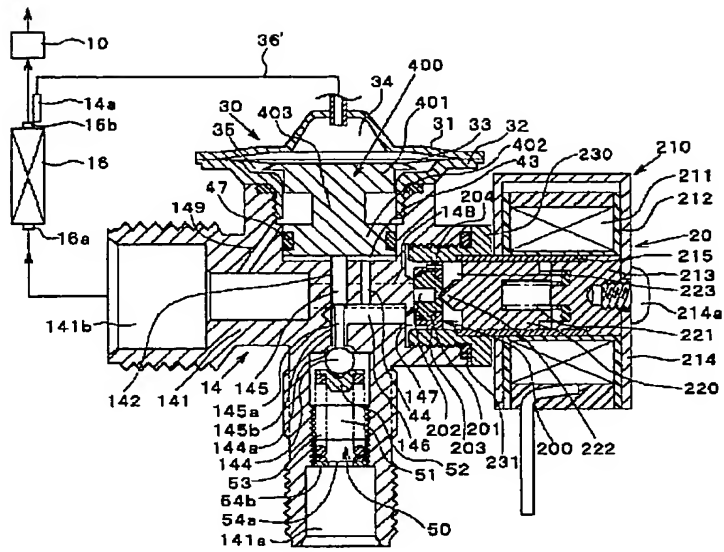
【図4】



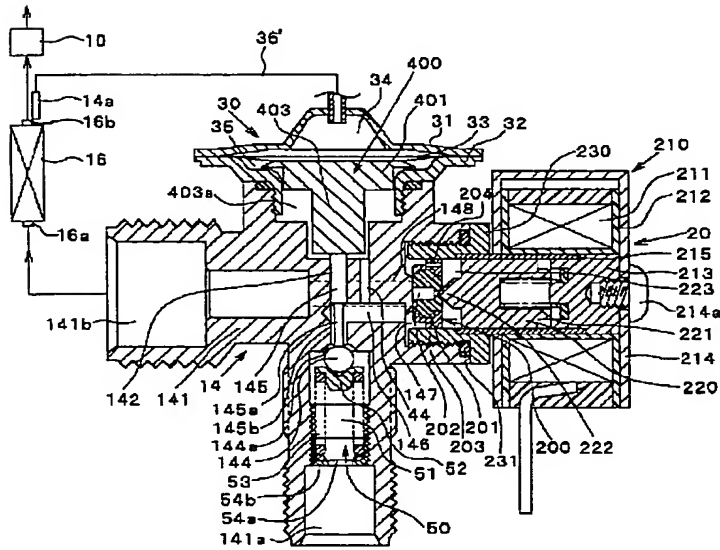
【図5】



【図6】



【図7】



【図8】

